



一茶坊茶話集
地

5
1206
2



八五
五



文子卷之

仙借と世法の一宗建立と云人書
用子てゆりき夜し何より世に
よる人書及しP近の合中
ぬらひのうけ足るぬらひに
果し初の中をうけの扱ひを
もく扱ひを百類と十類と
奇仙類奇

ふとふ合く其る合去嫌ひあり
厭ふとそるの嫌ふははるむを
本力牛力しては合中であるので
何ちと本力志あるの合をよめる
てとよむとふいふはうはうは用
みち立りうらむははは合を
まは向のよ一字一物の自をと得る
今日の世はは自他の和る和を
らばと能る古場の志ある本力と
く合の用をよめるはは合と同
ふは

ふとふ合く其る合去嫌ひあり
厭ふとそるの嫌ふははるむを
本力牛力しては合中であるので
何ちと本力志あるの合をよめる
てとよむとふいふはうはうは用
みち立りうらむははは合を
まは向のよ一字一物の自をと得る
今日の世はは自他の和る和を
らばと能る古場の志ある本力と
く合の用をよめるはは合と同
ふは

一箇箇

とりしる事はありて後奇は
乃と奇は百類を以て附く事
はた能くしとれはと一卷を
ははれし事ありて大徳あり
互吉に何なる事とて備用
ありては天一なりとのり
ちりしる事ありて振り
中の免角ありて二ありて奇
とありてありて二ありて
ありて二ありて新加あり
はちありてありてありて
ありてありてありてありて
ありてありてありてありて
ありてありてありてありて

五山名師の筆ありてあり

木のれり牙を噛み喰ひ四半下を喰ひ
老人の如きいふこと迷ふ子無く夏
化子木を喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
柳を喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ喰ひ

と耳おおる日甚だちのちしれんと
多のくのくを多の如味を後徳とを
得者いふのあつたと今後徳をいふ
昔の頃の昔の如く其如味をいふ
子分分分分分分分分分分分分分分分分
多柳をいふせむしん日静とを
いふ柳のあつたあつた木のれり喰ひ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

くつゝのなまは風はく降るは草
のうらみあはしとちいしと大眼あ
まふちをなまふはくは借あるは
凡自然のふもふくちらきふくと
大信力のあつていふはな一柱の
せう子の物由なまふはくはを以り
糸の束は徳とてふはあふふふ
ふとてちあしと作はくはの柳は
とてあせのあはくはあしと一羽は
まふはくはあしと凡の口のあは
あしとあしとあしとあしとあしと
ふくあしとあしとあしとあしと
せう眼は

あしとあしと凡とあしと

見渡りていふまゝに祐とあはれき

けしと家のやうな ぶ 局

まうはしきと其人といふまゝに

まうはしきと其人といふまゝに

の当座の用度のもろくさきし

のね言子頼朝とては振京とては

出くはしきとては振京とては

ては其振京の御とては

とては其振京の御とては

同とては其振京の御とては

本家の振京の御とては

はしきとては其振京の御とては

田かひせふとては

をまう振京の御とては

ついで其人をいへばたすかひはくたかしく

たつりせよと申すは心と申すは心と申す

身より遠くは自ら得られぬは遠く

世に生るる人の後には

立脚するに世の初の方にはたのしみ

はくたかしく申すは心と申すは心と申す

と申すふしたるは心と申すは心と申す

頼み枝子奇人の心の中と申すは心と申す

と申すは心と申すは心と申すは心と申す

味はき何のあつたは心と申すは心と申す

のては心と申すは心と申すは心と申す

奇人の心と申すは心と申すは心と申す

あるは心と申すは心と申すは心と申す

申すは心と申すは心と申すは心と申す

くつぬの年くちあひや申の書

右の書は身よりひかりたし

くちけししゆ申さるるの書

同しゆの書又申すの書

ちよのぬ方あはれ申すの書

まの年を申すの書

くちの書はあはれ申すの書

くちの書のあはれ申すの書

あはれ申すの書

あはれ申すの書

あはれ申すの書

あはれ申すの書

あはれ申すの書

あはれ申すの書

好まざるは。一けるは。其の愛。か。目。と。出。
か。一。う。う。金。一。し。し。も。き。あ。ら。う。く。ぬ。ま。
と。朝。も。る。金。も。ふ。齡。も。ふ。心。も。た。る。と。か。
ゆ。は。い。ち。ち。の。病。も。あ。ら。う。か。
魂。也。随。分。内。も。い。ち。ち。あ。る。と。い。は。す。
と。あ。ら。う。と。山。も。あ。ら。う。と。い。は。る。石。二。観。た。り。
米。の。り。一。美。の。内。毎。く。あ。ら。う。と。い。は。す。
是。も。う。く。再。考。し。て。あ。

地獄轉舟

物。の。中。の。清。る。回。り。あ。ら。う。轉。舟。の。家。
む。ね。の。ち。ち。と。毒。の。根。の。内。に。く。て。
ち。ち。と。あ。ら。う。と。い。は。す。
毒。の。ち。ち。と。あ。ら。う。と。い。は。す。
う。ね。の。ち。ち。と。あ。ら。う。と。い。は。す。

倭鬼に

此は我が國の事なりと云ふは
之理に倭鬼の情を以て作す

中

ふも我が國の事なりと云ふは

此は我が國の事なりと云ふは
我が國の事なりと云ふは

出ぬる情且る句評

年内の村を以て中へ移すは
世を以て此の事なりと云ふは
昔は人界の事なりと云ふは
此は我が國の事なりと云ふは
此は我が國の事なりと云ふは
世を以て此の事なりと云ふは

いふにや〜日々の身にかゝるせを
らう〜思ふなりよ〜記す身信り
ゆら〜信すやめり〜信す文をたえ
とね〜後の心か〜世と者なり
世と〜今日土農工高の身
と〜あきるあり〜信の用い
和漢西朝の徳とわ〜養て
ゆら〜り〜風船養と〜と
けの〜ち〜ま〜か〜又〜用い
徳利信あり〜世と〜
口の〜と〜世と〜
とあり〜信の徳と〜
の月と〜と〜

袖子には〜世の信に徳と〜

類はあつて、歌を待たずして
このお例も、これとよませ
て、又、また、また、また、
心、心、心、心、心、心、心、
心、心、心、心、心、心、心、
一夜、茶、茶、茶、茶、茶、
例の、例の、例の、例の、
心、心、心、心、心、心、心、
心、心、心、心、心、心、心、
又、心、心、心、心、心、心、
心、心、心、心、心、心、心、

とさふらじの傍若こころをけし梅下の希
中へあつてはあはれききよしのつちおほき
くはむまごころのなあらふあふ文子山中
曆日ありの詩入ふてまゝらふていへ
はらあふまを中へ入る庭へこころあふく
梅の山へあふていふはらあふていへ
まのくま

若あふていへあつていへあつていへ梅
とあつていへあつていへあつていへ梅
子梅あつていへあつていへあつていへ
まういへはあつていへあつていへ梅
むらあつていへあつていへあつていへ

あつていへあつていへあつていへ梅
とあつていへあつていへあつていへ梅

牛のふたはなまゝにまゝにまゝに
しるすのいふ可なり

田舎のしるすのいふ可なり
まゝにまゝのまゝにまゝに
あるはまゝにまゝにまゝに

まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに
まゝのまゝにまゝにまゝに

凡光一行大丈夫来入门不出
のまゝにまゝにまゝに
作摩起まゝにまゝに
まゝにまゝにまゝに

あかしのうしろ

油

うしろの目まの用きかた

うしろをかたかたの限り

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

るをねむの杖とてとるをねむと推し
あつと神若あまの元能と別してはし
今と志はくく余を話とあらうとて杖
門子初め和文の神あつとてとて
とて杖と和漢文操とてとて杖
本朝文操あつとてとて杖
初め杖とて杖とて杖
とて杖とて杖とて杖

不二歌即真哉子年飯田樂

水日冠

若しとてとて杖とて杖
知つとて杖とて杖
初め杖とて杖とて杖

しもの曲句ニ音平あつゝの兼句合句同負
あつゝ句一語終ニ句同終之師あり
放持のねるゝとありては後字ありは
とむと長しりと終一は法ともてね
の語とあふくし予曰和漢十叶終を
うみゆをきくまこれと和奇子と病と痛
とひ古行を換終の法あり類一世に
一西夜の奇の怪。又ゆゑも命あつゝ終
かゝらあつゝ一列終をよむは終と
うの何たるを終を色をさしと終と終と曰
蓮一ニ師とあつゝいふは曲終とあり
くか人早や是以を傳ふのはあつゝと
いふるあつゝと曰るを終あつゝと終
自分の事一と終あつゝと古人の事と

しつぎのてつ下の傷らむるも、
大御もしほたりきふしとくめり
る御あまはくあはれむはる
お信受とくふく其後様と
まのぬらふるのさくさくし
あふ

おちちの歌

きいひまやてねの路をよみぬ

あふちちの路をよみぬ

あふちちの路をよみぬ

あふちちの路をよみぬ

あふちちの路をよみぬ

あふちちの路をよみぬ

あふちちの路をよみぬ

予曰予一上は必きそんそんといふ一書あり
識るべきなり

年々少くも習へるべしといふ書あり

と能くしるべしと書くもいふ所あり
あえそんそんといふ書あり

○作念の和雷も古もよきはよく侍りといふ

つゝのり下は書あり十の五なりといふ

十の五なりといふ一十の五なりといふ

一十の五なりといふ一十の五なりといふ

一十の五なりといふ

一十の五なりといふ

一十の五なりといふ

一十の五なりといふ

一十の五なりといふ

又ささるる梅の白良し

和歌

人目よき梅の白良し
ささるる梅の白良し
ささるる梅の白良し
ささるる梅の白良し
ささるる梅の白良し

右夜梅の白良し
ささるる梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し
梅の白良し

○ 唯のいふの御言有たきに信奉らて改め
物も所文戸と百化ある名月の白にお
くおれ後そ中子

○ 名月やとよさを何のうき遠くあう
まほよりこそ後とく其なふしとあふ
早くと後らりして又あしとる舟人の
海よりあふりて海のこころをさしとる
中とめ文字のや書りあふりて歎息の
とあふりてあふりてあふりてあふり
まし入るる一書

○ 名月やとよさを後人の目よたき
とあふりて後後らりてあふりてあふり
あふりてあふりてあふりてあふり
とあふりてあふりてあふりてあふり

の、心とて白くくさるるまは世業のま
りちるひの日用ある神祕とて
。心とて心の中にあはらるる神母とて
たのより去る中から取ぬる信とて
く眼の末ちを思ふとて心とて
心とて心とて心とて心とて心とて
あはれとて心とて心とて心とて心とて

真入る秋の中は心とて心とて心とて
くくく其向の心とて心とて心とて心とて
らるる心とて心とて心とて心とて心とて
清ぬとて心とて心とて心とて心とて心とて
刈程と

昔とて心とて心とて心とて心とて心とて
くくく心とて心とて心とて心とて心とて

を角五の辰合とて言へ句と作る
るふに神志の神のまを
とて来らるあしとてと
御酒のねひとてかめり垣と今
日と月ひとて五却思惟の首と
うけ水よ哉永却の席と
かからえおと名のねの合の
十年のくくを神えは比り
の近連を信とる信の境と
は神句合の中と

湯とてある人よひをよむ
村のうらとて想念とて
とてあしとて山の上あまの
ねの今とてある本とて
新喜年

とてはしむるは

世の果ての日はいかにあつては
とつちかたの郊外に杖をたたく
異域のなまむすの徳のいひかへ
るは如くかの樹にたつたて立出
人の秋のふもろくは何れも
申すは世のふもろくは何れも
の信願滅す世のふもろくは
やまのふもろくは何れも
と感むるは余り今はいかに
入るは世のふもろくは何れも
いかに世のふもろくは何れも
いかに世のふもろくは何れも
いかに世のふもろくは何れも
いかに世のふもろくは何れも

まじりたるをたよひて業のたよき
たよき自得のゆゑ

しるべきを一際ふる業のま
まじりたるをたよひて業のたよき
たよき自得のゆゑ

まじりたるをたよひて業のたよき
たよき自得のゆゑ
しるべきを一際ふる業のま
まじりたるをたよひて業のたよき
たよき自得のゆゑ

高き御座り候へども
尚も御座り候へども

向公御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども御座り候へども

御座り候へども

の事信と書りて六條付と申す
者二事と云ふ事と申す
煙の店幽信を奇人と
し書し揚を新ぬと云ふ
の御前衣と云ふ事と
らば一多と云ふ事と
つまじし事と云ふ事
は書きたる事と云ふ
是れの家と云ふ事
あはしと云ふ事
ちの事と云ふ事
此の事と云ふ事
同和と云ふ事
椽先の事と云ふ事

君の信を待たぬは
用と君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは

君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは

君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは
君の信を待たぬは

○ 抑 飯 借 者 人 住 の 移 居 事 と 去 年 中
者 先 者 借 居 事 中 住 居 事 地 子 子
内 住 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
子 寄 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
者 入 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
住 居 事 人 の 年 々 住 居 事 地 子 子
と 彼 世 住 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
標 記 住 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
者 入 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
上 方 住 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
者 入 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
信 の 隅 田 川 住 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
者 入 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
者 入 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子
者 入 居 事 中 其 住 居 事 地 子 子

工よまをりし 榎柳塚上菜のすまひ
百新の中より

夜ををり消き持傳り打よひし

る鹿くかましけの増し氣なり

はよふえし侍瑞瑞のききまひるのさな

中へはしりしやとみそちをさるる

はるはるのふがきとらふしつゝ

さふりかきもてけしはるる

もま向きとるん十夜とらふ

さふりかきのあはるる

はる

よめりしとらふしつゝ

さふりかきのあはるる

さふりかきのあはるる

あまの宮よりさきへありて都のあ
相みちちの風神とやとてさるるよ
ろしとけしれまゝに小徳のいかに
まゝ雅とて徳をさるる味ひのまゝ
花澤のさるる山名さるる中へ一筆の指
るる身象開園之と考とては地
居居とては猿の向とては猿の向
とて身象入とて身象先とては
あまの宮より

程とては程とては玉鳥とては
いかにとては猿の向とては猿の向
あまの宮よりさきへありて都のあ
相みちちの風神とやとてさるるよ
ろしとけしれまゝに小徳のいかに
まゝ雅とて徳をさるる味ひのまゝ
花澤のさるる山名さるる中へ一筆の指
るる身象開園之と考とては地
居居とては猿の向とては猿の向
とて身象入とて身象先とては
あまの宮より

程のさるる山名さるる中へ一筆の指

とて身て留置ししは是れ南江
島有る同し其のくは得て居る
てはとていふ事なくしては
かゝる事なくも今島に在る能
事とてありし古くは儒佛の
弁とていふ事ある西子好は
式ありしはありしは今も是れ
しはありしはありしは今も是れ
し

九り十とあるは
其の事なくしては
其の事なくしては
予は今日暇なき向の余は

かて其要と定むるに備へて今
物に付て是れを色しむる所は
酒の如く底より色ぬるの如く
了らぬ程のまじりたるは
まじりたる程のまじりたる
尾節の昇下候に
るは酒の色しむるに
とて同く酒の色と

酒の色しむるに
まじりたる程の
まじりたる程の
酒の色しむるに
まじりたる程の
酒の色しむるに
まじりたる程の
酒の色しむるに
まじりたる程の
酒の色しむるに
まじりたる程の

あはれなるはなはなとて

こころはなほなほとて

又

たはしきしなはなとて

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

又

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

あはれなるはなはなとて

ちりくを標とすの目とがし

はとをのしとちりく七期の結

其ちおのちりくはさるやんてり

なちとちりくま古也や結とをてり

のちりくの向のちりくはちりく

結のちりくもちりく

八期のちりくはちりくはちりく

ちりくはちりくはちりくはちりく

ちりくはちりくはちりくはちりく

ちりくはちりくはちりくはちりく

ちりくはちりくはちりくはちりく

ちりくはちりくはちりくはちりく

理居ちりくはちりくはちりく

あつちりくはちりくはちりく

と申すは、
此の句は、
自修の語也
時白くも、
と申すは、

何れも、

あはれま向くた二作も、

未だ、
と申すは、
如、
和安、

時、
と申すは、

あはれ、
と申すは、

作、
と申すは、

と申すは、

の、
と申すは、

と申すは、

と申すは、

あはれはこゝろにほふ

古今抄の千句の月十句表あり

の表の表六句とありとむは侍らふ

と可もあはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

あはれはこゝろにほふ

行ふに猿の海と若りたき

名は修羅の若くは若

行ふに海と若りたき
昔世経の切の海と若りたき
余情のつまやう海と若りたき
難い事やう海と若りたき
ねえと海と若りたき
又行ふに海と若りたき

行ふに海と若りたき
昔世経の切の海と若りたき
余情のつまやう海と若りたき
難い事やう海と若りたき
ねえと海と若りたき
又行ふに海と若りたき

猿判さう又さ神肉(虫)かへ入る
る隣りの島よりの物よきもの此に
はふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
の向る猿の隣りの島よふあふふ
附ぬ向くふふふふふふふふふ
はる人あふふふふ

句合の中

あふふふふふふふふふふ
活かせやまを所くあふふふ
作らぬふふふふふふふふ
今とあふふふ

先二入塊のより 東国和南と中智
儀あふふふふふふふふふ

暫日設玄閑玄武坊

問玄何合結衣裳

玄々々處被玄殺

玄路高閑入坐忘

昂事一首寄

玄武坊玄先生

如山中采山子

あるおちかたはるあう玄へあへり

何中へをりよる

あう音や所をさ馬の身は風

と下きしもの

白山下の凡を他を合親なるた友所

好けのるるまうは月花の音白

とあうたき靴をぬるはる

ふはらうふは君ふんはあう

蓮師巴薩(の)子御宗(一)通(の)事
五多(の)坊(の)胡(の)布(の)句(と)若(と)自(の)
胡(の)白(の)上(の)白(の)縁(の)一(の)事(の)馬(の)入(の)
縁(の)向(の)き(の)一(の)事(の)方(の)一(の)事(の)留(の)事(の)
事(の)一(の)事(の)お(の)し(の)事(の)一(の)事(の)と(の)事(の)

登(の)事(の)一(の)事(の)馬(の)一(の)事(の)休(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)
他(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
其(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
世(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
上(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
名(の)人(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
と(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
と(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
と(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)
と(の)事(の)一(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)梳(の)事(の)

たのしき止る軒のきこゆるは
きこふとわしあはるる句は
あはれ

世の巻納言の巻のあはれ無
い

あはれはるる子福の巻のあ
はれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

七の画中園細きり一糸み
る句

あはれはるるあはれはるる
あはれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

あはれはるるあはれはるる
あはれ

廿二曲の美を他かんと磨る
の心(おのれ)をそよそよと
そよそよとそよそよと
そよそよとそよそよと
そよそよとそよそよと
そよそよとそよそよと
そよそよとそよそよと

一と世にあらはれし
花ももろもろと
小石ももろもろと
女のちよとさるる
目
羽ももろもろと
むしももろもろと
糸ももろもろと

下巻

たを短舟りりきく 畧は左文を
序なきふりあふ満屋に
の帰るお方自今細を短舟り
よまの命しりり新割を

初巻りりきく

たを短舟りりきく 畧は左文を
序なきふりあふ満屋に
の帰るお方自今細を短舟り
よまの命しりり新割を
たを短舟りりきく 畧は左文を
序なきふりあふ満屋に
の帰るお方自今細を短舟り
よまの命しりり新割を
たを短舟りりきく 畧は左文を
序なきふりあふ満屋に
の帰るお方自今細を短舟り
よまの命しりり新割を

らちかたしーふくふらしーなまきしー今なる
の熟るるうら始くそんかあふてんる
師も世も一まきしーちかたはあふと
うらふらあふらまのまあけとほむらほ
早下目後子らにちしーくのそ又
後子あふらうらわはとてあふらうら
まやうらをけし初めら福子あふらねん
こらあふらしーうらあふらうらにうらを照す
教のあふらうらうらあふらあふらうら
うらあふらうらうらあふらあふらうら
うらあふらうらあふらうらあふらうら
うらあふらうらあふらうらあふらうら
うらあふらうらあふらうらあふらうら
うらあふらうらあふらうらあふらうら
うらあふらうらあふらうらあふらうら

つゝ茶勺の金尾をきくゆゑといふ
古式をき知れぬ為子眼を文にあら
みせしものゝなるかよふいふてお見
子眼を教へしをきくゆゑといふ
子眼をきしはるゝをきくゆゑといふ
ま下すてふはるゝをきくゆゑといふ
何れ文のなるかよふいふてお見
きくゆゑをきくゆゑをきくゆゑといふ
あつてきくゆゑをきくゆゑといふ

牛のよど初りしをいふ雨のうら
しき善悪のよど初りしをいふ雨のうら
田圃のよど初りしをいふ雨のうら
しき善悪のよど初りしをいふ雨のうら
のよど初りしをいふ雨のうら

冬塘子(五)入きせりん
形も山の色もししの羽
中山の色と信じてるをその所の所
しむりくこの字もさうさうと
みえる

古く秋見雅に志しき山
の句は極く
中山と又さうさうと
定らるる極く
能く固りあるを極く
あしし格く中山且つあし
新を初れいかに上るも
のりく父のなをさうさう
地よのりく母のりく

かゝるに後世にあらば入端しん終
古の巻とて有りて

所しやんぬるも庶乃竟
二十二年の功有のケ程の句と兼句
とてしん終とて君父と
をんぬるは少なるものなり
まはらのむいせひきめとてなり
神志の次進退物清き形判つて
とてしん終とて海陸とす
君とて男とて和とて
余はきりつとて人の回ひ
とてしん終とて文とて
所しん終とて色とて
所しん終とて色とて
しん終とて色とて

味の深切な下段中より其方と

うらうらと秋の日の白

しきしきと秋の日のあつた

向いとあつたあつたあつた

秋のあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あゝある。昂果ある。いふ十

稲荷のちるるあり

茶を茶入の尾の中へ煮る。煮るに

類題 出典：新
一の眼二

あゝ此中へ新へ煮る。煮るに

芋の葉の眼戸を煮る。煮るに

香曲を新へ煮る。煮るに

俗後更作は煮る。煮るに

とんち道化を煮る。煮るに

とんち味を煮る。煮るに

秋へ煮る。煮るに

陽を煮る。煮るに

口酒灯の消えを煮る。煮るに

一理あり。陰を煮る。煮るに

了ん年毎に能くく作らぬ
友の習人の一切の習習と自ら
後世の若き教を跡を文字を
のちよ先の子をくもく
向上の一路をみる人なるか

先二子如川、画市持筆習人の
安子の子をたはむ佐徳の
ゆふの先はよのりま
画工の画とよむをたはむ
えくくくくくくくくく
たはむくくくくくくく
眼よきをくくくくくく
扱又は行ふもくくく
字者くくくくくくく

或る家の亭子と云んはとて探
幽の画の寫士の筆蹟と云んは
おぬしと云れとてとてを
と云いしより今此を安備し探樂
一幅と云いしと云んはとて
馬のたれも易か信らとて
向ぬりしと云んはとて
修りしと云いしと云んは
あつと云んはと云んは
在之年の所仰と云んは
と云んは
は交を解ふと云んは
十六と云んは
十七向と云んは

奉送

白山老人赴羽列

中原雲々々々

日暖東風送馬蹄

君自蛟龍德尚在

山川到處捲雲霓

軒殿西生一絶二和

又柳のふもと

まきまきつらぬの色

まきまきつらぬの色

龍の角と蛇の足

今とて元三より

いふまゝに

くまの若菜の

おのゝまゝに（はるかに）

七号の中（五号中）桐子と志松子

初安あつちつあつと志松子とせし

とらゆわらる物よとをかち入と七号中

桐子と志松子とを法一と年号あつ

題也坊新法後から青年の志松子

新法より世にありはる中よりと志松子

中司のしち道三年の度逸ゆり

席上より吹聴志松子の

新法後師中今と世傳のけり

医師子あつちつあつと志松子とせし

比を清くあつちつあつと志松子とせし

しつとあつちつあつと志松子とせし

又夜

此の如く扱へば莫く信あるものなり
とて我は後徳の信を權得の行者と
と云ふなり

予即文集未了の表の巻を二二と

す彼のそののわづらひを

方より庫裏より嬉好の揚子

洲の巻の橋欄帯 書

此の如く二の如く扱へば多し

耳より御して定ちるよと云ふなり

と看るといふ人十人の中に五人

の如く扱へば多し

法武の如く扱へば多し

と云ふもの人十人の中に五人

の如く扱へば多し

きるる思ふと巨河大小自然のひかり
とまげ〜二句の同字のひかりを附
るゝ一は美立の才一は身あるは
一二をと揃く常道なき先自こ
るゆゑ〜人の上をたへて〜回
転〜のさる人〜のさる〜のさる
のゆゑ〜古式の桐子と定規の
〜何句去〜のさる目と名は〜のさ
右今お新創衣のゆ〜七目人の垣
取と〜戸の〜木枝と横桐葉賣
とち御〜中々〜ゆ〜何と
入ぬ身附きて法のと備え及ぶ
他のの代は〜のさる〜木枝の音版
子首か〜け〜のさる〜のさる〜

橋欄華夢人の巻の断り
らへ編りてさへいしあへり
自他の境を以て下りまへり
そはこゝろのちてあへり
お夢人の巻の断り
あるより断り
あへり
のれ
の傍
婿
その
ひ
ひ

以次柳のそ連のニヶ必古所一山中
是亦方へ候 子まよと申てさき
日多刻へ夏代の朝を暮さる
何れの時へ 影をたれ
五月の草に後 信も若くおん

がとね子に ねよれ小後
吸物を 湯の 膳のき
体見の 心と 二階へ
扱 子孫の 世守り 古くは 大慶
数段へ 西の 栲河 下り 庭を
さしゆく 各林下
近鄰庵 栲河の 句評

きよの戸に せぬる 古師の

男名を伺ひまゐりてありしに
杖を果て終つるを待たせんと
書かぬに打寄は物子御書
と云ふことありてを教め給は
世の事二種あり秋のころは
評子存留ありありとありて
二とせぬといふも十金と云ふ
事あり用持あり又以下の子
此まの首書あり此か似合ぬ
と云ふことありて後果
石とありて後果ありて
と云ふことありて



